科　目　名	担当者名	開講学期	単位
社会保障特殊講義	田畑　洋一	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613640

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

社会保障の政策原理と改革に関する基礎的研究
1）社会保障の基本原理の研究
2）社会保障の政策課題
3）諸外国の社会保障改革

概要

社会保障の政策原理を多角的に探求し、わが国社会保障の将来像を考察する。具体的には、前期課程の研究課題である社会保障の基本原理、各制度の有機的連携、介護給付のあり方などの論点をいま一度整理するとともに、諸外国で行われた社会保障改革、とくにドイツの要介護の「新概念」を中心に、介護保障に関する日独比較を行い、わが国社会保障の政策原理ならびに改革の方向を展望する。しかし、後期課程ではこれらの課題を踏まえつつも、院生の個別研究テーマに即応した論点を明らかにし、独創的な研究成果の構築に資する指導に留意する。

キーワード

要介護認定、介護給付、要介護の「新概念」

授業の到達目標

1）社会保障の政策課題を学ぶことで自らのテーマの論点を明らかにできる。
2）社会保障の基本原理、特にドイツの介護保障の基本原則を学ぶことで、わが国の介護保障の現在および将来を展望することができる。
3）諸外国の社会保障改革に関する先行研究を踏まえることで自らの論文の独創性の構築に寄与できる。

授業計画

①社会保障の課題・論点の整理
②社会保障の原理原則
③社会保障の各制度の連携
④社会保障の給付システム
⑤ドイツの社会保障と社会保険
⑥ドイツ介護保障の政策原理
⑦要介護認定の日独比較
⑧就要介護認定の日独比較
⑨要介護度と給付の日独比較
⑩ドイツの介護保険給付と公的扶助としての介護扶助
⑪仕事の介護の両立
⑫生活保護と介護保険
⑬介護保障のあり方と展望
⑭介護の社会評価

⑮ドイツ介護保障のわが国への示唆

授業の予習・復習

◇毎回4時間程度の予習・復習を行うこと。
◇第1回目の授業時に各自の研究計画書を提出すること。
◇各自のテーマに関連する先行の博士論文を入手しておくこと。

使用教材

(1)Deutsher Caritasverband(Hg)(2017)SGBⅥ-Soziale Pflegeversicherung nach dem PSGⅢ inkl.“Hile zur Pflege“(SGBⅦ,7.Kapitel).
(2)Katrin Mohr(2007)Soziale Exklusion im Wohlfahrtsstaat vs verlag fur sozialwissenschaften.
(3)Gohde,J.(2013)Reformbedarf der Pflegeversicherung,G＋S.
(4)田畑洋一(2014)「ドイツの介護保険と介護改革の残された課題」『週刊社会保障』No.2802, 50-55.
(5)田畑洋一(2017)「ドイツ介護保険―要介護の「新概念」の導入と保険給付」『週刊社会保障』No.2918,48-53.
(6)田畑洋一(2014)『現代ドイツ公的扶助序論』学文社.
.

評価方法

レポート・報告内容60％、平常点40％

履修上の留意事項・授業時間外の対応

◇定期的な授業のほかに、随時時間を設けて集中的に指導することがあるので、連絡先を届けておくこと。
◇連絡先メール:ytabata@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

社会保障の政策原理と課題の深化は可能となったが、適宜、受講生の関心事について指導したため、シラバスどおりの授業進行とはならなかった。特に論文のまとめ方・書き方・引用文献の扱い方についての理解はかなり深まったと思う。、

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
生涯教育特殊講義	千々岩　弘一	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613790

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

人間の学びに関する内容の深化・拡充

概要

受講生の研究課題に即した内容を中心に講義する。
例えば、次のような講義展開となる。
1　研究課題の確認とオリエンテーション
2　研究課題に係わる教育界の歴史的展開
3　研究課題に係わる教育行政の要点
4　研究課題に係わる教育界の現状
5　研究課題に係わる教育界の問題点と課題

なお、講義の展開に当たっては、受講生同士の討論も重視する。

キーワード

アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標：自ら（受講生）の研究課題に即しながら、人間の学びのある階梯に焦点化した講義を受け、自ら（受講生）の研究を深化・拡充することができる。

授業計画

授業計画としては、例えば次のような展開となる。
第1回講義計画の確認と受講に関するオリエンテーション
第2回生涯教育に係わる歴史的展開1
第3回生涯教育に係わる歴史的展開2
第4回生涯教育の現状1
第5回生涯教育の現状2
第6回生涯教育の現状3
第7回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究1
第8回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究2
第9回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究3
第10回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究4
第11回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究5
第12回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究6
第13回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究7
第14回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究8

第15回講義の総括

なお、講義の展開に当たっては、受講生同士の討論も重視する。

授業の予習・復習

前時の助言を踏まえて、自分なりの課題を追究すること。
課題追究の質的深まりについては、次時の指導段階で確認する。

使用教材

必要に応じて適切な資料を配布したり、適切な文献を紹介したりする。

評価方法

評価は、次のような観点で行う。

1　授業への「関心・意欲・態度」
2　講義内容に関する主体的学習の有無
3　講義内容に関する理解と主体的な価値判断（「熟考・評価」として出された意見の質）

上記の観点に即した評価は、「観察」・「質疑応答の質」などでの方法を活用する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

アポイントを取ったうえで、遠慮なく相談に来てください。

前年度の授業評価

受講生の博士論文のテーマに即しながら、児童養護施設での教育のあり方について追究した。

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
職業教育特殊講義	吉留　久晴	前期	2

ナンバリングコード

D_WEL613752

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

職業教育の理論と実態

概要

職業教育（専門職の養成教育）の現状や課題、今後の在り方について、①専門職従事者に求められる能力の水準（該当免許・資格の水準）、②専門職従事者に不可欠な能力の形成手段、③専門職従事者の職務上の地位や待遇といった点等から検討する。

キーワード

職業教育、専門職、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

1. 職業教育に関する重要な知識・知見を習得することができる。
2. 職業教育に関する現状や諸問題について把握することができる。
3. 職業教育のあり方について多角的に考察することができる。

授業計画

1. 職業教育論を学ぶ意義
2. 専門職の概念
3. 準専門職の概念
4. 専門職団体の存在
5. 専門職の職域
6. 専門職の免許・資格制度
7. 専門職の報酬
8. 専門職養成をめぐる論議
9. 専門職養成の特徴
10.専門職養成のカリキュラム
11.専門職養成に関する課題
12.専門職養成の事例1－教員－
13.専門職養成の事例2－技術士－
14.専門職養成の事例3－管理栄養士－
15.総括

授業の予習・復習

各授業後に授業内容について、合計で4時間程度の復習を行うこと。

使用教材

テキストは使用しない。資料を配付予定。
【参考文献】橋本鉱市（編著）『専門職養成の日本的構造』玉川大学出版部、2009年。

評価方法

配付資料の分担報告の内容（40％）とレポートの内容（60％）により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

吉留が担当する「特別研究（博士論文指導）」を受講していることが望ましい。
授業外での質問等には、研究室で対応する。

前年度の授業評価

該当なし。

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
地域リハビリテーション特殊講義	松元　泰英	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613697

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

脳性麻痺を中心とした文献を閲読する

概要

近年、周産期医療の発達や不妊治療による多胎児での出産等により、超未熟児や早産などでの出産が少なくない。それらの子どもにはリスクが伴い、何らかの障害が見られることがある。その中でも、肢体不自由の子どもの場合には脳性麻痺の障害があることが少なくない。脳性麻痺の障害がある場合には、運動障害はもちろん、言語障害や摂食嚥下障害など多くの障害を有する場合が一般的である。それらの障害に対し、どのような治療法が有効なのか、また、エビデンスレベルとしてはどうなのかを先行文献から理解する。

キーワード

脳性麻痺　認知障害　摂食嚥下障害　言語障害　AAC　医療的ケア　重症心身障害　アクティブ・ラーニング
実務経験のある教員による授業科目（特別支援学校教諭の経験を有する）

授業の到達目標

1　脳性麻痺のエビデンスレベルの高い治療法について理解する
2　小児の摂食嚥下りハビリテーションについて理解する
3　重症心身障害児のケアとリハビリテーションについて理解する

授業計画

1　オリエンテーション
2　脳性麻痺の概要について
3　重症心身障害児の教育について
4　重症心身障害児のコミュニケーションについて（論文閲読）
5　重症心身障害児の定位反応について（論文閲読）
6　重症心身障害児のAAC活用について（論文閲読）
7　脳性麻痺の手術方法について（論文閲読）
8　脳性麻痺の治療法について（論文閲読）
9　脳性麻痺の摂食指導について（論文閲読）
10　脳性麻痺の粗大運動について（論文閲読）
11　脳性麻痺の装具療法について（論文閲読）
12　脳性麻痺の予後推測（1）（英文論文閲読）
13　脳性麻痺の予後推測（2）（英文論文閲読）
14　脳性麻痺の予後推測（3）（英文論文閲読）
15　脳性麻痺の予後推測（4）（英文論文閲読）

授業の予習・復習

参考書や論文を紹介するので、学習しておくこと。

使用教材

DVD　パソコンの資料　AAC機器等

評価方法

最終回でのまとめのテスト（40％）、平常点（60％）

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業中の討議内容や態度を平常点に加える。
質問がある場合には、メール（y-matsumoto@soc.iuk.ac.jp)にて、時間調整を行うこと。

前年度の授業評価

昨年度は未開講

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
介護福祉特殊講義	田中　安平	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613690

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

利用者の望む行為が、一方では生活の質を高めることに、他方では生命の長さを縮めることに繋がるときの介護の哲学・倫理について考察する。

概要

感情労働といわれる中で、「利用者対援助者」の感情の有り様よりも「援助者対援助者」の感情の差異が介護職員の離職に影響を与える介護現場・福祉現場において、「なぜ」そのようなことが起こるのか、どこに問題があるのか等について介護労働の現状を分析することから探っていく。

合わせて、同職種間における職員の価値観の差異と、他職種との価値観の差異がもたらす利用者主体に対するベクトルの差異をどのようにコーディネートすべきかについて、社会福祉の視点から探っていく。

講義自体が研究の場であり、講義の内容を常に現場にフィードバックする中で、介護の本質について研鑽を深めていく講義とする。講義から現場へ、現場から講義へ実践展開を活かすことで、理想と現実の狭間における生活支援の哲学・倫理を身につける。知識を智慧まで高めるのである。

キーワード

価値観の差異　介護の本質　介護の哲学・倫理　生命倫理　アクティブ・ラーニング　実務経験のある教員による授業科目（介護福祉士・社会福祉士・ケアマネ）

授業の到達目標

利用者の生活の質に着目した生命倫理が理解できる。援助者の価値観からするとマイナスと思える申し出に対して、寄り添うことができる。援助者と異なる利用者の価値観に徹底的に寄り添うことができる。他の専門職者に対しても、利用者の申し出を代弁できるプロの福祉援助者となることができる。ソーシャルワーク的視点を持った介護の専門家としての立ち位置を理解でき、他の専門職者とチームケアが展開できる能力を身につけることができる。

授業計画

第1回　生活の多様性（個人的生活）
第2回　生活の多様性（社会的生活）
第3回　価値観の多様性（実存的）
第4回　価値観の多様性（社会的）
第5回　介護独自の専門性（ケアカウンセリングの理解）
第6回　介護独自の専門性（ケアカウンセリングの実践方法）
第7回　介護における生命倫理（実存的）
第8回　介護における生命倫理（社会的）
第9回　介護における生と死（実存的）
第10回　介護における生と死（社会的）
第11回　介護と感情労働（実存的）

第12回　介護と感情労働（社会的）
第13回　ケアカウンセリング（1）
第14回　ケアカウンセリング（2）
第15回　ケアカウンセリングとスーパービジョン

授業の予習・復習

講義の実例として、受講生自身の現場体験をもとに進めていくので、常に現場における困難事例を持参すること。

使用教材

特定の教材を使用することはない。受講生提案の事例を使用テキストとする。必要に応じて資料等を準備し、資料等を基に個々の案件に対して模範解答の無いなかでベストな回答を探究する。

評価方法

発表等授業参加50％、レポート50％

履修上の留意事項・授業時間外の対応

講義で使用する事例を作成し、持参すること。事例等は評価の対象とする。
授業に対する熱意などは、減算で対応する（最大30％）。
講義等に関する質問等は、メールで受け付ける。yasuhira@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

1名の受講生であり、毎回受講生の事例等に対応した講義ができ、研究を深めることができた。

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
地域福祉特殊講義	高橋　信行	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613697

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

福祉計画と地域社会の関係を理解する。

概要

日本の行政福祉計画の歴史は、老人保健福祉計画からはじまった。それまでは総合計画の一部に盛り込まれていたにすぎなかった。平成5年以降、行政計画は量、質ともにさまざまに変化してきている。それらは自治体が福祉行政を展開するうえで、必要不可欠なものだったともいえようが、さまざまな課題も見え隠れする。ここでは、コミュニティワークを念頭に置きながら、その歴史的経緯とその策定プロセスを鹿児島における実際のケースを参照しながら、検討をすすめていく。課題については、コメント等を加えてフィードバックを行っていく。

キーワード

福祉計画、コミュニティワーク、アクションリサーチ、目的合理性、価値合理性、介護保険、小規模多機能

授業の到達目標

1. 行政計画の歴史的な流れを理解できる
2. 行政計画と民間計画の関係を理解できる
3. 福祉計画に関する住民参加の在り方を理解できる
4. 福祉計画が抱える課題を理解できる
5. 福祉計画のこれからの在り方について考えを持つことができる

授業計画

1. 福祉計画の現状と課題（オリエンテーションを含む）
2. 老人保健福祉計画からはじまった個別福祉計画
3. 自治体と住民が作る福祉計画－徳之島3町の障害福祉計画
4. 調査をどう利用するか－天城町地域福祉計画
5. 南大隅町地域福祉計画－身の丈に合った福祉計画
6. 調査と計画－コミュニティワークの視点
7. 調査と計画－アクションリサーチの視点
8. 中間まとめ－理論的な含み
9. あり方検討から地域福祉活動計画－旧姶良町地域福祉活動計画
10. 介護保険だけでいいのか－旧隼人町地域福祉活動計画
12. 行政計画と民間計画の連携－曽於市地域福祉活動計画
13. 小規模離島と福祉計画1－十島村の場合
14. 小規模離島と福祉計画2－獅子島の場合
15. まとめと展望

授業の予習・復習

次回の授業資料は、1週間前に提供し、予習ができるようにしたい。また課題等を課す。事前学習と事後学習で4時間程度は必要とする。

使用教材

授業時に配布する

評価方法

レポートによる評価（80%）と平常点（20%）によって総合的に評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワーは、授業終了後として、時間外の対応はメール等でお願いしたい。
nobu@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

いまだ履修者がゼロの科目である。

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
社会病理特殊講義	佐野　正彦	前期	2

ナンバリングコード

D_WEL613680

使用言語

日本語で行う授業。

授業形態

演習（新入生ゼミナール，専門演習，論文・研究指導，ワークショップ，対話・討論型授業）

テーマ

前期課程における「社会病理学特講」を前提に(したがって，あらかじめ前期課程の社会病理学特講を履修していることが望ましい)「社会病理とは何か？」を深く考え，教員と履修生とのあいだに，討論（ディベート）を通じて相互の共通理解を構築したいと思う。

概要

授業は，社会病理学に関わる内外の文献を2，3選定し，これらを熟読し、討議する（ディベート）かたちで進めていきたます。

キーワード

社会病理、逸脱、レッテル貼り、スティグマ、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

前期課程で開設避けている「社会病理学特講」を前提に，「社会病理とは何か？」を根源的に掘り下げて理解できるようにする。また，自らの研究テーマに関連付けて考えられるようにする。さらに，「社会病理現象」の潜在機能（隠れたハタラキ）を理解できるようにする。

授業計画

第01回　オリエンテーション　「社会病理学」の特徴――概念的自明性は本当か？――
第02回　ロンブローゾの「生来性犯罪人」論――祖先返りは事実か？――
第03回　ロンブローゾの遺産――犯罪の性染色体論への系譜――
第04回　シカゴ学派の社会問題論――自動車産業とマフィアの町・シカゴ――
第05回　シカゴ学派のアメリカ社会病理論への影響――西進主義の果てに――
第06回　サザランドの分化的接触論――朱に交われば赤くなる――
第07回　サザランドの分化的接触論と「ホワイトカラーの犯罪」論――ブルーからだけが犯罪者ではない――
第08回　マートンのアノミー論と緊張理論①――百万長者か？　銀行強盗か？――
第09回　マートンのアノミー論と緊張理論②――犯罪を誘発する社会・アメリカ――
第10回　コーエンの非行文化理論――非行副次文化と中流階級文化――
第11回　ラベリング論のパースペクティヴ①――相互行為過程と逸脱――
第12回　ラベリング論のパースペクティヴ②――レッテル貼りは回避できるのか？――
第13回　「原因論はいかに可能か？」①――何が本当の原因なのか？――
第14回　「原因論はいかに可能か？」②――多元的印紙論は可能なのか？――
第15回　「社会病理とは何か？」再考

授業の予習・復習

授業前には予習を2時間以上行うこと。
授業後には、学習内容をしっかり整理したうえで、理解できなかったことの自己学習をすること。

使用教材

教科書は開講時に指示します。また,「参考文献」は授業内で適宜指示する予定です。

評価方法

「口頭発表50%、レポート50%」で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワー等につきましては初回の授業時にお知らせいたしますが、質問・相談は随時受け付けていますので、希望者はメール連絡をしてください。msano@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

福祉社会学研究科全体の授業はどうかという観点より，大学院生から授業評価を受てけいる。

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
ソーシャルワーク特殊講義	門田　光司	集中	2

ナンバリングコード

D_WEL613690

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

ソーシャルワークの定義や歴史及び実践モデルについての理解を深めるとともに、種々な事例を通して実践モデルの活用を促していく。

概要

本講義では、ソーシャルワークが発展してきた経緯及び多様な実践モデル（一般システム論的視点、生態学的視点、エンパワメントの視点、ストレングスの視点、ナタティブの視点、レジリエンスの視点、他）について、配布資料や研究論文から学習を深めるとともに、種々な事例報告内容を通して、これらの実践モデルがどのように活用されていくのかの理解と習得を目的とする。

キーワード

ソーシャルワーク、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

ソーシャルワークの発展経緯を踏まえ、ソーシャルワーク固有の専門性について理解できる。また、ソーシャルワークの実践モデルについての理解を深め、種々な事例について実践モデルの活用方法についても理解できる。

授業計画

第1回　ソーシャルワークの定義について
第2回　ソーシャルワークの発展史
第3回　一般システム論的視点について
第4回　一般システム論的視点による事例検討
第5回　生態学的視点について
第6回　生態学的視点による事例検討
第7回　エンパワメントの視点について
第8回　エンパワメントの視点による事例検討
第9回　ストレングスの視点について
第10回 ストレングスの視点による事例検討
第11回 ナラティブの視点について
第12回 ナラティブの視点による事例検討
第13回 レジリエンスの視点について
第14回 その他のソーシャルワーク実践について
第15回 ソーシャルワーク実践モデルのまとめ

授業の予習・復習

授業前には、ソーシャルワーク実践モデルに関する書籍（参考図書①～④のいずれかを1冊）を必ず読んでおくこと。そして、各授業を参考図書にて再度振り返りを行い、次の講義時で理解しにくかったことを質問してくるこ

と。
及び授業後には、各実践モデルに関する知識や理解を事前学習及び事後学習で行っておくこと。

使用教材

教科書は使用しない。随時、資料を配布する。

評価方法

平常点50％、発表50％

履修上の留意事項・授業時間外の対応

以下の参考図書を事前学習及び事後学習に活用してください。
①加茂陽(編)「ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために」(世界思想社 2000年)、②久保紘章・副田あけみ(編)「ソーシャルワークの実践モデル」(川島書店 2005年)、③フランシス・J・ターナー著・米本秀仁(監訳)「ソーシャルワーク・トリートメント」(中央法規 1999年)、④山辺朗子・岩間伸之「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」(ミネルヴァ書房 2004年)
授業内容の質問は、授業前後で対応していく。

前年度の授業評価

シラバス内容については、変更はありません。

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
児童家庭福祉特殊講義	岩井　浩英	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613694

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

現代の家庭等生活問題および子ども家庭ソーシャルワークについての実践的検討・考察

概要

本科目では、現代の家庭等生活問題および子ども家庭ソーシャルワークについて、ウェルビーイング追求の視点から実践的に検討・考察することを目的とする。

※なお、毎年度、受講生の興味・関心を踏まえ、時宜に適った特色ある問題を設定する予定である。

キーワード

現代の家庭等生活問題、子ども家庭ソーシャルワーク、ウェルビーイング追求の視点からの実践的検討・考察、アクティブラーニング、実務経験のある教員による授業科目（専門相談員の実務経験を有する）

授業の到達目標

1. 現代の家庭等生活問題の概況、および、子ども家庭ソーシャルワークの基本理解を再確認する。
2. 受講生の興味・関心を踏まえ、ウェルビーイング追求の視点から実践的に検討・考察する

授業計画

第1回　序
・オリエンテーション
・「現代の家庭等生活問題」概況（整理）
第2回　序
・「子ども家庭ソーシャルワーク」基本理解（復習）a
第3回　序
・「子ども家庭ソーシャルワーク」基本理解（復習）b
第4回　序
・予備演習（受講生の興味・関心）
第5回　検討・考察
・課題演習（保育・子育て（家庭）支援領域関連）a
第6回　検討・考察
・課題演習（保育・子育て（家庭）支援領域関連）b
第7回　検討・考察
・課題演習（養護・自立支援領域関連）
第8回　検討・考察
・課題演習（障がい児（者）支援領域関連）
第9回　検討・考察
・課題演習（子ども家庭ソーシャルワーク関連）a
第10回　検討・考察
・課題演習（子ども家庭ソーシャルワーク関連）b

第11回　検討・考察
　・課題演習（子ども家庭ソーシャルワーク関連）c
第12回　検討・考察
　・課題演習（子ども家庭ソーシャルワーク関連）d
第13回　検討・考察
　・課題演習（子ども家庭ソーシャルワーク関連）e
第14回　検討・考察
　・課題演習（子ども家庭ソーシャルワーク関連）f
第15回　総括・補足
　・全体を通して（補）
　・まとめ
　※各回、〔岩井〕専門相談員実務経験に基づく。

授業の予習・復習

〇各自、授業前後に合計4時間程度の予習・復習を必ず行うこと。
〇具体的な学修内容は、毎回授業時にそのつど指示する。

使用教材

参考書：
◎九州社会福祉研究会（編）『第2版　21世紀の現代社会福祉用語辞典』学文社
　※その他、必要に応じて、そのつど参考書を紹介する。
特記：
〇教科書は使用せず、プリント資料を配付する。
〇「福祉小六法」（最新年度版）について、毎時間持参することが望ましい。

評価方法

課題演習＋期末レポート　80%
受講状況　20%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

〇演習形式を基本とし、課題演習を随時導入する。
〇随時課すレポート等課題に対するフィードバックは授業中に行う。
〇上記「評価方法」における「受講状況」とは、受講の意欲・態度や取り組み等を踏まえるものである。
〇授業時間外の対応については、初回授業時に指示する。
　※メールアドレス：iwai@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

〇本科目の趣旨等を再確認しつつ、今年度も、引き続き、問題特論として、応用・実地的な話題提供や議論を重ねていく。

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
社会福祉リサーチ特殊講義	佐野・高橋信	前期	2

ナンバリングコード

D_WEL610027

使用言語

日本語による授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール，専門演習，論文・研究指導，ワークショップ，対話・討論型授業）

テーマ

(佐野)質的調査の根底にある考え・思想を理解する。
（高橋）アクション・リサーチを理解する。

概要

（佐野担当部分）
「質的研究法を支える前提諸理論を考える」をテーマにします。エスノメソドロジーや会話分析などのこうした諸理論は「社会現象は人々の相互行為のなかで構築されていく」という共通的視座がある。履修者にはこの「社会構築主義的視座とは何か？」について一定の理解をもってもらう。
（高橋担当部分）
社会福祉の分野でますます重要な方法論となっているのが、アクション・リサーチの手法である。ともすると質的研究法に特化した手法のように思われがちであるが、この方法は質的、量的の両手法に展開可能である。リサーチは、研究者だけの独占物ではない。調査対象者の立場や意向、そしてエンパワーする力に注目した共同作業としてのアクション・リサーチを理解することで、研究法そのものの在り方をも見直すことができるだろう。ここでは特にストリンガーの「アクション・リサーチ」に依拠する。

キーワード

（佐野）構築主義，構成主義，状況，レッテル貼り，アクティブ・ラーニング
（高橋）脱中心化，脱規制化，実践面における協同化，ステークホルダー

授業の到達目標

(佐野)質的調査の根底にある考え・思想を対話的に理解する。
(高橋)研究対象者をも巻き込み、共同作業のなかで研究をする進める手法を理解する。

授業計画

1回～7回　佐野担当
第1回　オリエンテーション、ラベリングあるいはラベリング論とは何か？
第2回　ラベリング論からエスノメソドロジーへ
第3回　社会問題の構築主義とは何か？
第4回　言説と言説分析
第5回　フーコーの権力論
第6回　フーコーの学問論・知識論
第7回　社会構築主義再考

8回～15回　高橋担当
第8回　①アクション・リサーチとは何か　序文
第9回　②ストリンガーのアクションリサーチ　1章

第10回　③ストリンガーのアクションリサーチ　2章
第11回　④ストリンガーのアクションリサーチ　3章
第12回　⑤ストリンガーのアクションリサーチ　4章
第13回　⑥ストリンガーのアクションリサーチ　5、6章
第14回　⑦ストリンガーのアクションリサーチ　7、8章
第15回　⑧ストリンガーのアクションリサーチ　9章

授業の予習・復習

（佐野・高橋）授業前には指定部分を2時間以上予習し，授業後には学んだことについて理解できたことと不分明なところを整理したうえでさらなる理解に努めること。

使用教材

（佐野）　授業で使う教材は授業の初日に指示します。英語論文も読む予定です。
（高橋）　E.T.ストリンガー『アクション・リサーチ』監訳　目黒輝美，磯部卓三　フィリア2012

評価方法

（佐野）「平常点50％，レポート50％」の割合で評価する。
（高橋）「平常点50％、レポート50％」の割合で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワーなどについては開講時に話し合いによって決めます。何か疑問点や質問点がありましたら，次のメール・アドレスを通じて対応いたしますので，遠慮せずにアクセスしてください。msano@soc.iuk.ac.jp（佐野）
テキスト購入等に関しては、受講生と話し合ってから決めたい。オフィスアワーは授業終了後行う。時間外の場合は、メールでお願いしたい。nobu@soc.iuk.ac.jp（高橋）

前年度の授業評価

（佐野・高橋）本特講は2人の教員によって分担する形式で行います。前年度は1人の履修がありましたが，履修者と相談しながらそれなりに満足できる内容の授業ができたと思います。

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
特別研究（博士論文指導）	岩井　浩英	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_WEL710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

子ども家庭ソーシャルワークに関する（博士論文）研究

概要

本演習では、ウェルビーイング追求の視点から、子ども家庭ソーシャルワークに関し専門研究的に議論・検討し、各自のテーマに基づく（博士論文）研究を遂行することを目的とする。

※各自の（博士論文）研究テーマ等を設定すること、（博士論文）研究遂行に必要な知識・方法等を学習すること等を含む。

キーワード

子ども家庭ソーシャルワークに関する専門研究的な議論・検討、各自のテーマに基づく（博士論文）研究の遂行、アクティブラーニング、実務経験のある教員による授業科目（専門相談員の実務経験を有する）

授業の到達目標

1. 各自、自分の子ども家庭ソーシャルワークに関する（博士論文）研究テーマ等を設定・確認する。
2. （博士論文）研究に必要な知識・方法等を学習する。
3. 各自のテーマに基づく（博士論文）研究を遂行する。

授業計画

〈年次別概要〉

1年次：（博士論文）研究計画の立案（「研究計画書」作成・提出を含む）

2年次：（博士論文）研究計画に基づく調査等の実施（「中間報告」を含む）

3年次：（博士論文）研究論文の作成（「口頭試問」「結果報告」を含む）

〈1年次計画〉

第1回

・オリエンテーション（前期に向けて）

第2回

・子ども家庭ソーシャルワークに関する予備学習a

第3回

・子ども家庭ソーシャルワークに関する予備学習b

第4回

・（博士論文）研究テーマ等の設定・確認a

第5回

・（博士論文）研究テーマ等の設定・確認b

第6回

・（博士論文）研究テーマ等の設定・確認c

第7回

・（博士論文）研究方法等演習a

第8回
・(博士論文)研究方法等演習b
第9回
・(博士論文)研究方法等演習c
第10回
・先行研究等調査a
第11回
・先行研究等調査b
第12回
・先行研究等調査c
第13回
・その他の予備学習・演習a
第14回
・その他の予備学習・演習b
第15回
・前期のまとめ
第16回
・オリエンテーション(後期に向けて)
第17回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)a
第18回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)b
第19回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)c
第20回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)d
第21回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)e
第22回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)f
第23回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)g
第24回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)h
第25回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)i
第26回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)j
第27回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)k
第28回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)l
第29回
・(博士論文)研究計画書提出
第30回
・後期のまとめ
※各回、〔岩井〕専門相談員実務経験に基づく。
〈2年次計画〉
第1回

・オリエンテーション（前期に向けて）
第2回
・研究計画等の再確認a
第3回
・研究計画等の再確認b
第4回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）a
第5回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）b
第6回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）c
第7回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）d
第8回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）e
第9回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）f
第10回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）g
第11回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）h
第12回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）i
第13回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）j
第14回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）k
第15回
・前期のまとめ
第16回
・オリエンテーション（後期に向けて）
第17回
・研究内容等の再点検a
第18回
・研究内容等の再点検b
第19回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）l
第20回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）m
第21回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）n
第22回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）o
第23回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）p
第24回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）q
第25回
・（博士論文）研究（個別指導を含む）r

第26回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)s
第27回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)t
第28回
・(博士論文)研究(個別指導を含む)u
第29回
・(博士論文)中間報告書提出
第30回
・後期のまとめ
※各回、〔岩井〕専門相談員実務経験に基づく。

授業の予習・復習

○各自、授業前後に合計4時間程度の予習・復習を必ず行うこと。
○具体的な学修内容は、毎回授業時にそのつど指示する。

使用教材

特記:
○使用教材等は、演習を進めるなかで別途指示する。

評価方法

課題レポート等＋研究計画書(1年次)／中間報告書(2年次)　80%
受講状況　20%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

○演習参加において、自分なりの問題・課題意識を常に高めつつ、積極的な取り組みを心がけること。
○随時課すレポート等課題に対するフィードバックは授業中に行う。
○上記「評価方法」における「受講状況」とは、受講の意欲・態度や取り組み等を踏まえるものである。
○授業時間外の対応については、初回授業時に指示する。
※メールアドレス:iwai@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

○前年度実績を踏まえ、今年度もより良い博士論文指導の工夫を心がける。

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
特別研究（博士論文指導）	佐野　正彦	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_WEL710027

使用言語

日本語で行う授業。

授業形態

演習（新入生ゼミナール，専門演習，論文・研究指導，ワークショップ，対話・討論型授業）

テーマ

社会病理学・犯罪社会学・逸脱の社会学にかかわる諸視角の理論的深化を目指します。

概要

本演習では，主として特定の〈社会病理現象〉を研究対象として措定し，その徹底研究により学位請求論文を執筆し，「博士号」を取得することを目指します。

キーワード

社会病理，逸脱，スティグマ，レッテル貼り，ディベート，アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

社会病理学・犯罪社会学の諸視角に関して理論的深化につとめ，自らの研究テーマにアプローチ(接近)できることを目指します。

授業計画

この1年間で何を達成するか？ 『大学院の紀要』や『学会誌』などに論文を掲載することを目標として学習する。これまでに培ってきた「学知」をさらに精錬させ、いかなるパースペクティヴから研究対象に迫るかを決定する。さらに、研究対象とする特定の〈社会病理現象〉に関わる「日本的・世界的事情」を的確に把握した上で、独自の「仮説」を提示し、その「科学的検証」を目指す。
より具体的には、博士論文審査のフローチャートに基づいて、「研究計画書」を提出し(1年次)、「博士論文計画発表」を行い(1年次)、「博士論文中間報告」を行ったうえで(2年次)、その成果を学会などで公表し、併せて「査読論文」を執筆する(2年次)などの学的営為を経て「博士論文」を書く(3年次)ことになる。
こうしたプロセスを着実に経ることによって、博士論文に耐えうる専門技術や研究能力を培うことができるのである。

第01回　オリエンテーション――1年間の目標を定める――
第02回　論文執筆に必要な文献には何があるかを考える。
第03回　論文執筆に必要なキーとなる学者・研究者などを考える。
第04回　論文執筆に必要な学会・研究会などを考える。
第05回　研究発表＆討論①――アイデアは？――
第06回　研究発表＆討論②――どこに独自性があるのか？❶――
第07回　研究発表＆討論③――どこに独自性があるのか？❷――
第08回　研究発表＆討論④――論文の表記方法❶――
第09回　研究発表＆討論⑤――論文の表記方法❷――
第10回　研究発表＆討論⑥――何を論拠にするか？❶――
第11回　研究発表＆討論⑦――何を論拠にするか？❷――
第12回　研究発表＆討論⑧――論理的思考と論理的記述――

第13回　論文の途中経過レポート提出
第14回　レポートの検討
第15回　前期にやったことの総復習
第16回　オリエンテーション－後期の6ヶ月どのように過ごすか――
第17回　前期作成レポートを〈論文〉に仕上げていく①
第18回　前期作成レポートを〈論文〉に仕上げていく②
第19回　前期作成レポートを〈論文〉に仕上げていく③本――稿は博士論文の中でどのような位置づけになるのか？――
第20回　社会病理学のパースペクティヴ再考①――いかなるパースペクティヴが使えるのか？――
第21回　社会病理学のパースペクティヴ再考②――社会解体論――
第22回　社会病理学のパースペクティヴ再考③――犯罪の正常性――
第23回　社会病理学のパースペクティヴ再考④――犯罪の潜在機能――
第24回　社会病理学のパースペクティヴ再考⑤――犯罪者へのリアクションの効果――
第25回　社会病理学のパースペクティヴ再考⑥――文化論――
第26回　社会病理学のパースペクティヴ再考⑦――学習論――
第27回　社会病理学のパースペクティヴ再考⑧――社会の階級論――
第28回　社会病理学のパースペクティヴ再考⑨――社会病理の定義問題――
第29回　社会病理学のパースペクティヴ再考⑩――社会と社会病理――
第30回　1年間の研究生活の総括

授業の予習・復習

授業前には，2時間以上の予習を行うこと。
授業後には、，学んだことをしっかり整理したうえで，理解できなかった内容につき自己学習につとめること。

使用教材

博士論文の進捗具合を勘案して適宜指示する。

評価方法

学位請求論文の内容により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワー等につきましては初回の授業時にお知らせいたしますが、質問・相談は随時受け付けていますので、希望者はメール連絡をしてください。msano@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

福祉社会学研究科全体に対する授業評価が行われた。

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
特別研究（博士論文指導）	高橋　信行	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_WEL710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

研究法としての質的研究法、量的研究法、ケーススタディ法およびアクションリサーチ、プログラム評価を理解したうえで、博士論文作成に取り組む。

概要

博士論文作成の予備作業として、研究法の解説を中心に学習を行う。これらを通して、研究論文作成の過程を理解する。事例研究や調査手法についての理解が十分でない場合は、順次それらについての情報を提供する。課題についてはコメントを加え、フィードバックを行う。

キーワード

アクティブラーニング、アクションリサーチ、質的研究法、量的研究法

授業の到達目標

研究法としての質的研究法、量的研究法、ケーススタディ法を理解し、研究に活かすことができる。

授業計画

1　　オリエンテーション／研究するということ－プログラム評価とアクションリサーチ
2　　質的研究法を学ぶ／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
3　　量的研究法を学ぶ／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
（以下よりは、プログラム評価とアクションリサーチの学習を含める）
4　　プログラム評価概論1／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
5　　プログラム評価概論2／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
6　　プログラム評価概論3／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
7　　プログラム評価概論4／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
8　　プログラム評価概論5／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
9　　プログラム評価概論6／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
10　　プログラム評価概論7／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
11　　プログラム評価概論8／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
12　　プログラム評価まとめ／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
13　　アクションリサーチ（以下AR）を学ぶ―専門的活動と公的活動における研究
14　　ARの理論と原則／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
15　　AR舞台を設定する：研究プロセスを計画する／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
16　　AR見る：見取り図を作る／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
17　　AR考える：解釈し、分析する／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
18　　AR行動する：問題を解決する―計画し、持続可能な解決方法を講じる／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
19　　持続可能な変化と発展をめざす戦略的計画 ／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議

20　　AR形式の整った報告書／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
21　　ARを理解する／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
22　　ARのまとめ／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
23 地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
24 地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
25 論文指導1／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
26 論文指導2／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
27 論文指導3／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
28 論文指導4／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
29 論文指導5／地域福祉学ゼミナール／学生テーマ討議
30 論文指導6（論文作成の進捗状況に即した方法論の指導）
＊地域福祉学ゼミナール（野口定久著『地域福祉ゼミナール』2018

授業の予習・復習

授業時に課題として提示するものと、事前に配布するものとがある。少なくとも4時間以上の学習時間を担保する。

使用教材

ストリンガー『アクション・リサーチ』目黒輝美・磯部卓三（監訳）発行フィリア　発売　星雲社　2012
マイケル・スミス『プログラム評価』藤江昌嗣（監訳）梓出版社　1990

評価方法

レポート内容によって80％評価し、20％は平常点とする。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワーは授業終了後に行う。時間外の場合は、メール等で行う。nobu@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

履修者がおらず、授業評価は行っていない。

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
特別研究（博士論文指導）	千々岩　弘一	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_WEL710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

設定した研究テーマに関しての新たな見解や独自性のある見解の創出

概要

受講生の研究テーマに基づいて、その研究を深化させる文献購読や調査などを行う。

キーワード

アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標：問題意識に基づいて設定した研究テーマに関し、これまでの研究の到達点を踏まえながら、新たな見解や独自性のある見解を創出することができる。

授業計画

受講生の研究テーマに基づいて、毎回、研究の進捗状況を報告し、それに基づいて意見交換及び助言を行う。
第1回オリエンテーション（演習の目的・目標、内容、方法、評価などに関する説明）
第2回博士論文研究テーマの設定1
第3回博士論文研究テーマの設定2
第4回博士論文研究方法の確認
第5回博士論文構成の立案1
第6回博士論文構成の立案2
第7回博士論文参考文献リストの作成に関する助言
第8回博士論文草稿の作成1（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）
第9回博士論文草稿の作成2（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）
第10回博士論文草稿の作成3（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）
第11回博士論文草稿の作成4（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）
第12回博士論文草稿の作成5（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）
第13回博士論文研究方法の再確認
第14回博士論文草稿の作成6（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）
第15回博士論文草稿の作成7（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）
第16回博士論文草稿の作成8（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）
第17回博士論文草稿の作成9（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）
第18回博士論文草稿の作成10（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）
第19回博士論文草稿の作成11（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）
第20回博士論文草稿の作成12（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）
第21回博士論文草稿の作成13（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）

第22回博士論文草稿の作成14（研究の進捗状況の報告とそれに対する助言）
第23回博士論文草稿の完成1（完成した修士論文の報告とそれに対する助言）
第24回博士論文の完成2（修正した修士論文の報告とそれに対する助言）
第25回博士論文の校正1
第26回博士論文の校正2
第27回博士論文の校正3
第28回博士論文の完成
第29回口頭試問準備①
第30回口頭試問準備②

授業の予習・復習

前時の助言に基づいて、自らの課題を追究すること。

使用教材

受講者による「文献リスト」の作成をもとにしながら、必要に応じて、文献・資料を配布・紹介する。

評価方法

論文作成に対する態度及びその質に対して、研究発表やレポートなどの質で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

アポイントを取ったうえで、遠慮なく相談に来てください。

前年度の授業評価

前年度は受講者がおらず、授業評価は行っていない。

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
特別研究（博士論文指導）	松元　泰英	1～3年次	8

ナンバリングコード

M_WEL710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討議型授業）

テーマ

修士論文及び先行研究を基にしてテーマ設定をする必要があるため、テーマの内容に関しては特に決められたカテゴリーはないが、できれば、重度重複障害児に関係することが望ましい。

概要

修士論文及び先行研究をより深く探求することで、現在解明されていない課題を洗い出す。そして、その課題を解決するための研究方法や手段を具体的に設定し、研究実践することで、博士論文の基礎的ベースを作り上げる。

キーワード

エビデンス、統計、アンケート、KH-Coder、データーベース、アクティブ・ラーニング、実務経験のある教員による授業科目（特別支援学校教諭の経験を有する）

授業の到達目標

修士論文及び先行研究を基にして、自ら研究課題を考え、それに対する研究内容、方法等を考察する。そして、その研究内容や方法等に従って、研究実践を行い、その研究結果を考察し、最終的に博士論文としてまとめることができるような内容に仕上げること。

授業計画

第1回　修士論文の振り返り
第2回　修士論文の振り返り
第3回　研究課題の洗い出し
第4回　研究課題の洗い出し
第5回　研究課題の洗い出し
第6回　研究課題の洗い出し
第7回　先行文研の研究
第8回　先行文研の研究
第9回　先行文研の研究
第10回　先行文研の研究
第11回　先行文研の研究
第12回　先行文研の研究
第13回　先行文研の研究
第14回　研究内容と方法の決定及び確認
第15回　研究内容と方法の決定及び確認
第16回　研究内容と方法の決定及び確認
第17回　研究内容と方法の決定及び確認
第18回　研究内容と方法の決定及び確認
第19回　研究内容と方法の決定及び確認

第20回　研究内容の方法と決定及び確認
第21回　論文の執筆（論文の概要）
第22回　論文の執筆（論文の概要）
第23回　論文の執筆（論文の概要）
第24回　論文の執筆（研究の背景）
第25回　論文の執筆（研究の背景）
第26回　論文の執筆（研究の目的）
第27回　論文の執筆（研究の目的）
第28回　論文の執筆（研究の方法）
第29回　論文の執筆（研究の方法）
第30回　論文の執筆（研究の方法）

授業の予習・復習

基本的には、自分自身で研究実践は進めていく。論文指導の時間は、教員との博士論文の方向性や結果の確認の時間とする。そのため、授業時間前には、必ず授業で話し合う内容の資料を完成しておくこと。また、授業の前後には4時間程度の予習復習を行うこと。

使用教材

学生の持参する研究結果及び資料、先行研究資料

評価方法

3年後の博士論文審査

履修上の留意事項・授業時間外の対応

論文の書き方や実践方法については必要に応じて随時研究室を訪問すること。

前年度の授業評価

昨年度まで未開講

科　目　名	担当者名	開講学期	単位
特別研究（博士論文指導）	吉留　久晴	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_WEL710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

教育学研究に必要な能力の習得及び向上

概要

本演習で、受講生は教育学研究法に関する指導を受けながら、以下のような研究活動に取り組む。まず、博士論文作成につながるように、各自の問題意識に基づき研究テーマを設定する。ついで、そのテーマに関する先行研究の収集・分析を行い、先行研究で十分に解明されていない課題について明らかにする。さらに、上記の基礎作業を行いながら、問題意識・研究テーマを一層明確にしつつ、関連する論文や資料の収集・分析に取り組む。こうした研究活動をベースとして、受講生にはオリジナリテイーの高い博士論文の作成を目指してもらう。

キーワード

教育学研究、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

1. 教育・学校問題に関する諸問題等を多角的かつ客観的に把握することができる。
2. 教育・学校問題に関する事実や実態等を究明することができる。
3. 調査・分析した内容等を口頭および文章で論理的に説明することができる。

授業計画

※下記の内容は受講生の人数や研究テーマによって変更する可能性がある。

第1回　　前期ガイダンス
第2・3回　研究テーマの設定
第4・5回　文献資料の収集・分析法の指導
第6～10回　先行研究の分析結果の発表
第11・12回　研究方法の指導
第13～15回　研究視角・方法の検討
第16回　　後期ガイダンス
第17～25回　研究成果の発表
第26～29回　研究計画・論文構成の検討
第30回　　総括

授業の予習・復習

各授業後に授業内容について、合計で4時間程度の復習を行うこと。

使用教材

テキストは使用しない。参考文献等については、授業中に適宜紹介する。

評価方法

授業での発表やレポートの内容、研究活動の進捗状況・成果などにより評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業外での質問・相談等には、研究室で対応する。

前年度の授業評価

該当なし。